

図書紹介

『遠お羅ら天て釜がま』(白隠えかく禅師著)

大野 妙恵

この本は、今から260年ぐらい前の、白隠えかく慧鶴えかく禅師が63～67歳の間に、4人の人物にあてた手紙から成っています。『鍋島せつしゅうこうきんじ撰 州侯近侍に答ふる書』『遠方の病僧に贈る書』『法華宗老尼の問に答ふる書』『念仏と公案と優劣いかん如何の問に答ふる書』であります。禅師愛用の茶釜の銘を題名にしておられます。

\* \* \*

1970年1月18日と入手した日が裏表紙に記してあり、以来初則の公案に苦しんだ日々もその後も常に携行してどれだけ助けられたか分からない。

「大悲う倦むなき」(注1)粘り強く根気よい、くどいばかりの激励がどの頁のどの一行にも繰り返される。この道いったんを一旦志した者をひとり残さず目的の地まで必ず行かせるのだ、という禅師の決意と自信と慈愛の手紙であります。

闇でも深い霧でも照射して灯台の灯ひのように道心みを呼び醒まし、倦けんたいや悲観から救い上げ正気わをとり戻させ元気を湧き立たせてくれた。

しばらくひと繻かないでいると、次のような言葉が自然に口に出た。

謂いふ事なか勿じんれ塵務む(俗界の煩雑な事務)はんじょ 繁絮はんじょにして参禅いとまに暇なく、世事ひんぶん續紛として工夫ひんぶん続き難しと。

道心がぼんやりして世間の荒波に溺れそうな時に、禅師の**進**る慈愛の一行一行が活字であることを超えて激しく迫ってくる。

禅師が手紙を書かれる様子が目に浮ぶ個所を『鍋島撰州侯近侍に答ふる書』から見てみましょう。

何の追**従**にか終夜孤燈を挑げ老眼を摩**挲**(こする)して、  
 はてしもない問はず語りを、繰り返し繰り返し書き送り待**た**るべきや。道理ある事に思**お**ぼさば、捨て置かず熟読し給**たま**ひて、  
 内観養生の秘術に契**かな**ひ給ひ、心身共に壮健にして、速やかに  
 参禅得力、**因**地一下(大悟徹底してアッと声をもらすこと)の歡喜をも得給へかし。

夜を徹して手紙をしたため、明け方出発する雲水に託し、書中  
 に取るべき所があったら清書書写して、15部ほどもつくり、皆で  
 修行の助けに読んで欲しいとあるところ。

睡らざるもの一夜、晩陰より書して天明に至れば、醜書既  
 に五百行を得るといへども、猶情実を尽す事能はず、老来暗  
 記の力無くして、前に書しけるを後又書し、始め演けるを終  
 に亦演ぶ。字々烏焉(あやまり)多く、行々魯魚(あやまり)  
 の差**たが**いあれども、再看するにいとまあらず。裁封して以て顛  
 (雲水の名)が帰袖(帰郷)に附ず。……若し又書中  
 に取るべき**と**ころ**ば**ければ再び清書して進献せん。幕下(配下)書記  
 の人々に命じて繕写(浄書)三五冊、……分ち与へて時々  
 に熟読せしめ、……**困**み坐して聴受せしめ、……。

それから260年を経て、今もこの手紙は山喜房仏書林やその他

の出版社から書写出版されて修行者を励まし続けている事実は、白隠禅師の願行が生き続けている証<sup>あか</sup>しでありましょう。

1984年3月27日の朝日新聞の、山田耕雲老師（三雲禅堂主宰）の寄稿文中に次の件<sup>くだり</sup>がある。

【一高時代机を並べていた中川宋淵（竜沢寺住職）から、この本を読んでみたまえと渡されて、一読してその気迫に圧倒された。その後の私の精神的航路は、この本から影響を得て一生を貫いたといっても過言ではない。】

この本とは、もちろん『遠羅天釜』である。

まだなら「君、この本を読んでみたまえ。」

合掌

#### 編集部注

（注1）大悲：多くの人々の苦しみを救おうとする仏（覚者）や菩薩<sup>ぼさつ</sup>（成仏を目指す修行者）の広大な慈悲心。

#### 著者プロフィール

---



大野妙恵（本名／憲以子<sup>けいこ</sup>）

昭和12年生まれ。昭和42年、人間禅立田英山老師<sup>みしやう</sup>に入門。現在、人間禅布教師。庵号／微笑庵。